

日本産菌類考察 (一)  
Miscellaneous Notes on Japanese Fungi. I.

逸見武雄・倉田静子  
by Takewo HEMMI and Shizuko KURATA

(1) *Phyllosticta Castaneae* ELL, et Ev.

Hab. クリ (*Castanea pubinervis* SCHNEID.) の葉

静岡県富士岡村 1929年8月18日 倉田静子採集

本菌は 1894 年 ELLIS 及び EVERHART 兩氏 (Proc. Acad. Phil., p. 355) が命名したるものにして、従來北米合衆國及び歐州に産すること知られたれども、本邦に於ける發見の記録なし。病斑は葉の兩面に於て認め得れども、上面の方一層明瞭なり。小なる病斑は略々圓形なれども、互に相癒合して間もなく不規則形を呈す。病斑は淡赭褐色乃至赭白色を呈し乾燥狀にして、濃厚なる帶赤黑褐色の明瞭なる周縁を有し、徑約 1-8 mm. あり。子殻は葉の上面病斑組織中に生ずるも、後表皮を破りて頸部著しく突出す。徑 105-112  $\mu$ , 高さ約 80  $\mu$  あり。胞子は長橢圓形又は長卵形にして透明、長徑 4.2-5.6  $\mu$ , 短徑 1.58-2.14  $\mu$  あり。

以上の性質を *Phyllosticta Castaneae* ELL. et Ev. 菌の記載 (ALLESCHER in RABENHORST's Kryptogamen-Flora, Auf. II, Bd. I, Abt. VI, s. 29, 1901; SACCARDO, Syll. Fung., Vol. XI, p. 476, 1895) と比較するに、胞子の大きさに於て筆者等の菌多少小なるも [5-7 $\times$ 2-2.5  $\mu$  (SACCARDO); 5-7 $\times$ 2-3  $\mu$  (ALLESCHER)], 其他の性質大體一致す。而して *Castanea* に寄生する *Phyllosticta maculiformis* SACC. (SACCARDO, Syll. Fung., Vol. III, p. 35, 1884) は子殻が葉の裏面に生ずる點、胞子の大きさに於て時々彎曲する點等に於て本菌と異り、*P. nubecula* PASS. (SACCARDO, Syll. Fung., Vol. X, p. 116, 1892) も亦子殻が葉の裏面に生じ胞子小にして 2.5 $\times$ 1.8  $\mu$  に過ぎざるの點に於て一致せず。*P. punctiformis* SACC. (SACCARDO, Syll. Fung., Vol. XVIII, p. 241, 1906) も葉の裏面に子殻を生ずる點及び胞子が 4-4.5 $\times$ 1-1.2  $\mu$  にして稍々小なる點

異り、*P. fusispora* ELL. et EV. (ELLIS and EVERHART, The North American Phyllostictas. p. 74, 1900) は孢子が僅かに彎曲し且著しく長き點 (15-18×3 $\mu$ ) 及び一定の病斑を形成せざる點にて別種なり。又 *P. castanicola* ELL. et EV. (SACCARDO, Syll. Fung., Vol. XIV, p. 862, 1899; ELLIS and EVERHART, l. c., p. 18) は本菌に類似する處あるも記載せられたる孢子の大き 3-3.5×1.25-1.5 $\mu$  にして本菌に就きての筆者等の測定より稍々小なり。

以上の如く本菌は *P. Castaneae* 及び *P. castanicola* に最も近く孢子は前者の記載より稍々小にして、後者の記載より大なり。然れども其他の性質は大體に於て前者に近き傾向あるを以て、筆者等は本菌學名に前者を當つることとせり。

## (2) *Venturia Kunzei* SACC.

Hab. ナハシロイチゴ (*Rubus triphyllus* THUB.) の葉  
京都市高雄 1931年10月18日 逸見武雄採集

本菌は葉に特別なる病斑を形成することなし。子囊殻は小黑粒點散生の状態をなして、葉の上面に生じ、最初表皮を破りて露出するも、後には殆んど表面的に發育し、組織中には基部極めて僅か埋没するに過ぎず、徑 140-150 $\mu$ 、高さ約 100 $\mu$ 、表面に多數の黑色剛毛を有す。剛毛は尖銳にして褐色又は暗褐色を呈し、長さ 25.6-60.8 $\mu$ 、幅は基部に於て 4.3-6.3 $\mu$  なり。子囊は棍棒狀にして長さ 41.6-58.0 $\mu$ 、幅 12.8-16.0 $\mu$ 、8個宛の孢子を藏す。孢子は二列に生じ、卵形にして二細胞、隔膜部稍々縊れ、淡黄橄欖色を呈し、長さ 11.4-13.6 $\mu$ 、幅 5.5-6.4 $\mu$  なり。SACCARDO (Syll. Fung., Vol. I, p. 588, 1882) によれば孢子は長さ 8-10 $\mu$ 、幅 4-5 $\mu$  にして、筆者等の測定より小なれども、SCHROETER (Die Pilze Schlesiens. II, S. 295, 1908) は長さ 11-13 $\mu$ 、幅 5.5-6.0 $\mu$  と記るしたるを以て筆者等の測定と一致す。

本菌は古來種々なる學名の下に取扱はれ來りたるものにして、*Coleroa Chaetomium* RAB., *Dothidea Chaetomium* FR., *Exosporium Rubi* NEES, *Stigmatea Chaetomium* (KUNZE) FR., *Chaetomium circinaus* WALLR. 等の異名を有す。然れども *Venturia Chaetomium* (CDA.) DE NOT. 菌と本菌とは別種と認むるを至當とす (SACCARDO, Syll. Fung., Vol. I, p. 588, p. 591, 1882). 本邦に在つては白井光太郎博士日本菌類目録 (三宅氏補校第二報、p. 727 及び原氏増補第三版 p. 424) にナハシロイチゴ及びマツ屬植物の葉に *Venturia Chaetomium* (Cd.) CRES. et DE NOT. 菌の生ずる旨を記載せられたれども、筆者等は誤と見做すを至當と信ず。如何となれば該菌は *Pinus sylvestris* L. に生ずるものにして [SACCARDO, Syll. Fung., Vol. I, p. 591, 1882;

OUDEMANS, Enumeratio systematica fungorum., Vol. I, p. 495, 1919], 筆者等の調査せる範囲内に於てはナハシロイチゴとは全然無関係のものなり。恐らく *Venturia Kunzei* SACC. 菌の異名中類似名稱のものあるに因り混同せしものならんか。尙 *Venturia Kunzei* SACC. 菌は歐州及びアラスカに産すること知られ、従来寄主として記るされたるは *Rubus caesius*, *R. idaeus*, *R. pedatus*, *R. fruticosus* [以上 SACCARDO, Syll. Fung., Vol. XIII, p. 1054, 1898; STEVENS, Foreign Plant Diseases.—U.S. Dep. Agr., p. 159, 1926; SCHROETER, Die Pilze Schlesiens. II, S. 295, 1908], *Rosa sp.* [OUDEMANS, Enumeratio systematica fungorum., Vol. III, p. 645, 1921] 等なり。尙 *Rubus idaeus* に *Venturia Thwaitesii* MASSEE et CROSSL. 菌寄生すれども (SACCARDO, Syll. Fung., Vol. XVII, p. 651, 1905) 胞子の大きさ及び形状に於て本菌とは別種なること明かなり。

(3) *Clavaria corniculata* Fr. ヒメツノタケ

1 Hab. 林内土壤

神奈川県中郡東秦野村 1929年10月24日 逸見武雄採集

同 1930年10月30日 逸見武雄採集



第1圖

ヒメツノタケ *Clavaria corniculata* Fr.  
(1929年10月24日採集)

本菌は黄色 (Ochraceous Orange) にして分岐せざるか、又は僅に分岐せる小叢にして、外觀纖弱、高さ 13.5 cm., 太さ基部に於て 1-3 mm. に過ぎず (第 1-2 圖)。本菌は最初 *Clavaria muscoides* LINN. (1753) と命名せられたるものにして、COKER (The Clavarias of the United States and Canada, p. 80, 1923) は此學名を採用せり。然れども 1910 年ブラツセルにて制定の萬國植物命名規約 (Règles internationales de la nomenclature botanique, 1912) によりて見るに蕈類の學名は FRIES の Systema mycologicum (1821-32) を起點として採用す可きものなるが故に、上記學名を正當と見做さざる可らざるが如し。而して SCHAEFFER (Icones

Fung. Bovar., Pl. 173) は 1763年に本菌を *C. corniculata* SCHAEFFER と命名したため、BURT (The North American species of *Clavaria* with the illustrations of the type specimens- Ann. Miss. Bot. Gar., Vol. IX, p. 38, 1922) は SCHAEFFER の 學名を採用したるも同一理由により誤なり。而して COTTON, WAKEFIELD 兩氏 (A Revision of the British



第 2 圖

ヒメツノタケ *Clavaria corniculata* Fr.  
(1930年10月30日採集)

Clavariae—Trans. Brit. Myc. Soc., Vol. VI, p. 181, 1920) は FRIES の 學名を採用せり。本菌の本邦に産することは昨 1931年今井 (On the Clavariaceae of Japan. III.—Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., Vol. XII, p. 12) により初めて報告せられたるものにして、氏は北海道に於て採集したるが、筆者逸見は神奈川縣に於て採集したるを以て、本邦には廣く分布するものと認めざる可らず (逸見、日本産菌類に就きての二三の研究。講演要旨—植物學雜誌、Vol. XLVI, No. 545, p. 416, 1932).

胞子は略々球形にして透明なるか又は微かに黄色を帯び、表面平滑、一端に微小なる突起を有す。直径 4.2-7.0  $\mu$ 、一個の擔子基に四個宛小柄を生じて形成せらる。

(4) *Clavaria subfalcata* ATK. シロソウメンタケモドキ (新稱)

Hab. 林内土壤

京都府愛宕郡岩倉村 1931年7月15日 松尾薫四郎氏採集

本菌は 1908年 ATKINSON (Ann. Myc., Vol. VI, p. 58) により初めて命名せられたるものにして、僅かに群生するも、分岐せざる繊細なる絲狀菌なり。高さ 1.5-4.5 cm., 最も太き部分の直径 0.8-1.0 mm. にして、尖端より微かに黄色を帯ぶるも大體に於て白色なり。胞子は平滑にして透明、卵形、準球形又は橢圓形、大さ 5.7-10.23  $\times$  5.0-6.8  $\mu$ 、一個の明瞭なる乳狀突起を有す。一個の擔子基に四個の胞子を生ず。記載 (ATKINSON, l. c.; COKER, l. c., p. 21, 1923; BURT, l. c., p. 51, 1922) によれば本菌の胞子は卵形又は橢圓形なれども、本標本に在つては卵形又は準球形の

もの多し。其他の性質一致するを以て上記學名を當つることとす。本菌の本邦に於ける存在を報告せしもの無きを以て爰に筆者等はシロソウメンタケモドキの新和名を附することとせり。

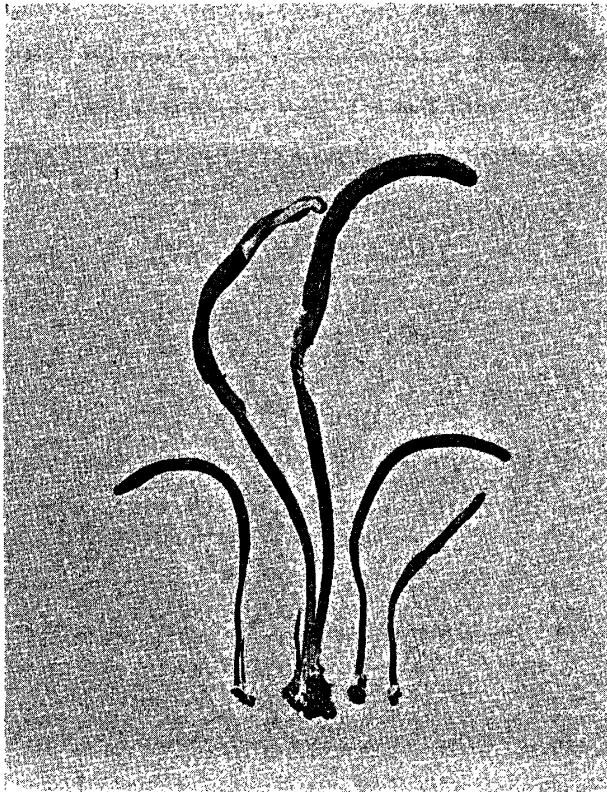
(5) *Clavaria aurantio-cinnabarina* SCHW.

アカナギナタタケ (新稱)

Hab. 林内土壤

京都府愛宕郡岩倉村 1931年7月15日 松尾薫四郎氏採集

本菌は1832年 SCHWEINITZ (Am. Phil. Soc. Trans., N. S. 4, p. 183) の命名に係はるものにして、本邦に於ける存在を報告せしものなきを以て爰にアカナギナタタケなる新和名を附することとせり。



第3圖

アカナギナタタケ

*Clavaria aurantio-cinnabarina* SCHW.

本菌は僅か二、三本宛群生するものにして分岐せず。全體濃厚なる橙赤色 (Orange Chrome) にして美麗なり。長棍棒状にして、太さ殆ど一樣なるか又は基部漸細す (第3圖)。筆者等の標本は高さ 1.5-5.0 cm., 太さは上部に於て 1.2-2.5 mm. なり。胞子は黄色にして球形、短橢圓形又は卵形なれども球形に近きもの多く、表面平滑にして小乳状突起を有し、 $5.7-7.2 \times 4.3-5.7 \mu$  の大きさを有す。擔子基に着生する胞子数は明瞭を缺きしも、2個のものあることを確實に證明せり。而して COKER (l. c., p. 60) は4個稀に2個のものある旨を

記載したるも、筆者等は4個のもの存在を證明し得ざりき。此點に對し尙多少の疑問あるも其他の性質は COKER (l. c.), BURT (l. c., p. 43) 等の記載に一致す。

(6) *Clavaria citrina* QUÉLET. ダイダイナギナタタケ (新稱)

Hab. 林内土壤

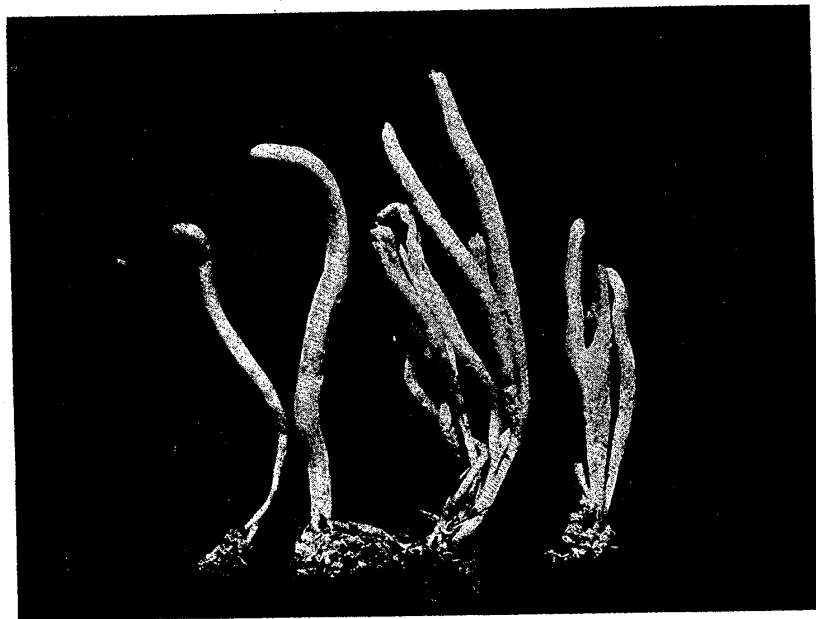
京都府愛宕郡岩倉村 1929年10月12日 松尾薫四郎氏採集

同 1931年7月15日 松尾薫四郎氏採集

本菌は COKER (l. c., p. 37) の記載せる *Clavaria helveola* PERS. に一致す。此學名は 1797 年 (comm., p. 69) の發表に係はり最も古き命名なれども、FRIES の *Systema mycologicum* 以前の命名にして、命名規約上之を採用し得ずとすれば、上記學名を使用す可きものならんか。筆者等は *C. helveola* PERS. と *C. citrina* QUÉLET. の兩基本標本を比較するの機會を得ざるが故に、果して同一なりや否やを爰に斷定し得ざれども、COKER (l. c.) の意見に従つて同一と見做すこととす。即ち *C. citrina* QUÉLET. は 1876 年 (Bull. Soc. Bot. de France, XXIII, p. 330) の發表に係はるものなり。

本菌は單獨に生ずることと、6,7 本宛群生することとありて、多くは分岐せざるも、時に叉狀に分岐せるものを混す。長棍棒狀にして、黄色 (Light Orange Yellow 又は Mustard Yellow) なるを以てキソウメンタケ (*Clavaria inaequalis* FR.) 及びナギナタタケ (*Clavaria fusiformis* FR.) に類似するも、胞子の形狀を全然異にするを以て容易に區別し得。

高さ 2.0-7.0 cm. にして最も太き所の直徑 2-3 mm., 細き淡色の柄部あり(第4圖)。胞子は平滑にして透明、橢圓形又は僅かに曲りて苹果の種子狀を呈す。長徑 5.34-8.01  $\mu$ , 短徑 2.67-3.34  $\mu$  にして、



第 4 圖

ダイダイナギナタタケ *Clavaria citrina* QUÉLET.  
(1929 年 10 月 12 日採集)

一擔子基に通常 2 個の胞子を生ず。

本邦に於ける存在を報告したるものなきを以て爰にダイダイナギナタタケの新和名を附して發表することとせり。

### (7) *Tubercinia Ranunculi* (LIBERT) LILO.

Hab. キツネノボタン (*Ranunculus japonicus* LANGRD.) の葉、葉柄及び莖  
京都府愛宕郡靜市野村 1932 年 6 月 18 日 逸見武雄採集

March, 1933.

115

京都市一乗寺

1932年6月22日 安部卓爾氏採集

本菌は従来 *Urocystis Anemones* (PERS.) SCHRÖT. (SACCARDO: Syll. Fung., Vol. VII, p. 518, 1888) 又は *Urocystis Anemones* (PERS.) WINTER (SCHELLENBERG: Die Brandpilze der Schweiz, S. 143, 1911) なる名稱にて記載せられたる菌中に總括せられたるものなれども、LIRO (Über die Gattung *Tubercinia* FRIES.—Ann. Univ. Fennicae Aboensis, Series A, Tom. I, No. 1, p. 69, 1922) は *Ranunculus repens* L. に寄生の菌を研究し、獨立の一種と見做せり。而して本菌を最初に研究したるは LIBERT (Pl. crypt. Ard. No. 195, 1832) にして、氏は之を *Sporisorium Ranunculi* LIBERT と命ぜり。

本菌は葉、葉柄及び莖を侵すものにして、最初被害局部肥大し後間もなく破れて内部より黒粉を飛散す。十分に成熟したるものの胞子を鏡檢するに大部分は孢子球を形成することなくして單獨に分離す。而して淡色の附屬細胞を全然伴はざる孢子極めて多きも、一個乃至數個の附屬細胞に圍繞せらるるもの普通なり。又二個の孢子集合して所謂孢子球を形成するものも亦相當に存在すれども、三個の孢子よりなる孢子球は極めて稀なり。斯の如き孢子球に在つても附屬細胞を伴はざるものあれど通常は之を有す。胞子は形狀不規則にして一定せざれども、球形又は短橢圓形のもの多く、卵形、多角形又は楔形のものも亦存在す。胞子は大き 12.8-17.9×11.2-13.1 $\mu$  にして暗褐色なり。附屬細胞は孢子より淡色にして約 7.5-17.05×6.14-10.23 $\mu$  の大きを有す。LIRO (l. c.) は本菌の胞子が附屬細胞を伴ふことの少き旨を記し、伴ふ場合にも 1乃至3個と見做したるは筆者等の標本と稍々異なる點とす。即ち筆者等は屢々數個の附屬細胞に圍繞せられたる孢子あるを認めたれども、他の性質を比較し同一菌なりとの結論に到達せり。LIRO と同一寄主に就きて研究したる SCHELLENBERG (l. c.) も附屬細胞數を 1-3個と記したるも、氏は最多6個迄有する胞子を圖示せしを以て、筆者等の見る處と一致するものと認めざる可らず。

元來 *Tubercinia* 屬は 1832年 FRIES (Systema mycologicum, III, 2, p. 439) の創設したるものにして、當時氏は本屬に3種を隸屬せしめたり。又 1846年 LÉVEILLE (Ann. Dc. nat. Bot., III, 5, p. 269) は *Polycystis* 屬を創設したるが、同一屬名が藻類中に存在するの理由に基き RABENHORST (Herb. viv. myc., II, No. 393) は 1856年に之を *Urocystis* と改めたり。爾來今日に至る迄 *Tubercinia*, *Urocystis* 兩屬は共に存立の價値を認められ來りたるものなれども、LIRO (l. c.) は多數の兩屬所屬の菌を檢したる結果、全然區別し得ざることを知りて、總てを *Tubercinia* 屬中に納めたり。

(8) *Tuburcinia japonica* (HENNING) LIRO

Hab. シウメイギク 一名 キブネギク (*Anemone japonica* STEB. et ZUCC.)

の葉、葉柄及莖

京都府愛宕郡鞍馬 1928年10月13日 野島友雄氏採集

同 1932年6月18日 逸見武雄氏採集

本菌は1904年 P. HENNING (Hedwigia, Vol. XLIII, p. 150, 1904; ENGLER, Bot. Jahrb., Bd. XXXIV, S. 594; SACC., Syll. Fung., Vol. XVII, p. 492, 1905) により *Urocystis Anemones* (PERS.) SCHROET. var. *japonica* P. HENN. と命名せられたる本邦特産の菌なり。LIRO (l. c., p. 65) は之を獨立の一種と認めたるのみならず、前述の理由に基き *Tuburcinia* に移せり。

本菌は前種と同様に葉、葉柄及び莖を侵して局部の肥大を基因するものにして、胞子成熟せば黒粉状をなして飛散す。胞子球は其形状不定にして、筆者等の測定によれば  $24.0-54.0 \times 19.2-44.8 \mu$  の大きさを有す。胞子球中の胞子数を明瞭に知ること困難なれども、多くは數個にして、密に結合し、小なる胞子球に在つてのみ1乃至2個なり。1個の胞子の大きさも亦測定困難なるも直徑約  $10.23 \times 13.64 \mu$  位にして、暗褐色なり。附屬細胞は淡褐色にして1個の胞子球を圍繞して多數に存す。其幅  $13.64 \mu$  下以下にして高さ約  $5 \mu$  なり。

(9) *Tuburcinia Cepulae* (FROST) LIRO

Hab. タマネギ (*Allium Cepa* L.)

北海道石狩國札幌 1928年7月4日 栗林數衛氏採集

本菌は葱頭黒穗病々原菌にして鱗莖又は葉莖を侵害し時に大害を與ふるものなり。一般に *Urocystis Cepulae* FROST なる學名によりて知られたる菌なれども、前述の理由によりて LIRO (l. c., p. 47) は *Tuburcinia* なる屬名を用ゆることを至當と見做せり。胞子は球形又は短橢圓形にして、殆ど全部1個宛分離し、極く稀に2個結合す。筆者等の測定によれば胞子の大きさ  $11.2-15.5 \times 10.0-14.3 \mu$  にして、多數の褐色小附屬細胞に周圍を圍繞せらる。筆者等は栗林氏の厚意によりて本菌を檢鏡するの機會を得たり。

(10) *Tuburcinia Tritici* (KÖRN.) LIRO

Hab. 小麥 (*Triticum vulgare* VILL.) 小麥の葉鞘及び葉

岐阜縣岐阜市外更木村 1930年5月6日 川田茂博氏採集

本菌は小麥稈黒穗病の病原菌にして、通常 *Urocystis Tritici* KÖRN. と稱せらる。



March, 1933.

117

前種同様の理由に基き LIRO (l. c., p. 17) は之を *Tuburcinia* 屬に改めたり。筆者等は安部卓爾氏の好意によりて本標本を検するの機會を得たり。

胞子は通常1個宛分離するも2個結合のもの亦尠なからず存在し、稀に3個結合のものあり。胞子(中央細胞)は球形、準球形又は短橢圓形にして濃褐色を呈し、 $13.76-19.0 \times 10.5-14.5 \mu$  の大きさを有し、多數の附屬細胞に圍まる。附屬細胞は小にして有色なり。

前述の如く LIRO は *Urocystis* 屬を *Tuburcinia* 屬中に併合したるが故に、氏の所見を正鵠と見做す時は、從來發表せられたる多數の *Urocystis* 屬菌は悉く *Tuburcinia* 屬に移す可きものなり。筆者等は爰に最近筆者等が檢したる上記4菌を紹介するに止むるも、氏は尙 *U. Anemones* (PERS.) SCHRÖT. を *Tuburcinia Anemones* (PERS.) LIRO に *U. Dioscoreae* SYD. を *T. Dioscoreae* (SYD.) LIRO に、*U. occulta* (WALLR.) RAB. を *T. occulta* (WALLR.) LIRO の如く改めたれども一々紹介することを省略す。而して LIRO が上記の所見を發表したる後と雖も尙從來の慣習に従ふ學者多し。然れども筆者等は LIRO の所説は合理的と思惟するが故に之を採用せんと欲す。

終に蒞み研究材料を寄與せられたる栗林數衛、安部卓爾(川田茂博氏採集)、野島友雄の諸氏竝に多數研究材料の採集、寫眞の撮影其他に於て尠なからず助力をされたる松尾薰四郎氏に深甚の謝意を表す。